言葉で読む芸術と言葉で聴く芸術

画家の思考への旅こそダイナミズム、画への思考の旅こそ豊かさか。

迂闊にも、この星は画で溢れていた！！

世界の画を通じて書いた
ショートショート
小説集　Vol1

著　とりいのぶひろ

目次

はじめに 1
目　　次 3
異端の KARAS は闇夜に二度啼く 4
鬼灯 (ほおずき) の実が、落ちるまで 15
ショートショート「夢殿」第二形態　2021 年秋版 22
夢殿・笑うひと泣くひと　第三形態　2021 年 12 月版 26
鱗　粉 34
あとがき 42

はじめに

手に取り眺め観て頂けた皆様には心から御礼申し上げます。

さて、オーディオブックというジャンルも定着して久しい昨今。Youtube の動画などでも多様な語り手の口をかりて多種多様な作品が語られるようになりました。そんな中、筆者は様々な芸術、中でも “絵画” を小説化し可視制限を抱えた皆さんに画のイメージをお届けすることは出来ないだろうか…　今から数年前そう考えました。

どうせ書くのであれば小説にしてみよう。

可視制限を抱え、画を直接見ることは出来なくても小説をオーディオブックとして音読を通じ聴くことが出来れば画を描いた作者の気持ちに寄り添えるのかもしれない。

また、見えない画が聴けることによって人生の豊かさはそれまで以上に輝きを感じることが出来るのかもしれない…　そう考えました。

長い間観光やツーリズムの仕事に携わってきた筆者が辿り着いた一つのゴールです。海外旅行へ行き、また国内旅行へ行き、様々な観光地を訪れ様々な美術館へ訪れることが出来るようになった現代。それでも可視制限という多様性を抱えられた皆様にとってはハードルが無いとは言えません。

筆者の書く小説を通じ、画の作者の想いに寄り添う。制限を持たない人々はそれを読んで頂き一つの気付きを得て頂ければ有難い次第。制限を待たれる人はオーディオ化を通じ音読で楽しんで頂ければ幸甚です。

一人でも多くの皆様、そして一人でも多くの制限を抱える皆様の心の豊かさに繋がることが出来れば幸甚です。来るべき日に向け、オーディオブックでも聴いていただけるよう尽力してまいります。

筆　とりいのぶひろ

EGON
SCHIELE
1912

目　　次

■異端の KARAS は闇夜に二度啼く　　2022 年 8 月

■鬼灯 (ほおずき) の実が、落ちるまで　2022 年 6 月

■ショートショート「夢殿」第二形態　2021 年秋版

■夢殿・笑うひと泣くひと　第三形態　2021 年 12 月版

■鱗　粉　　2022 年 5 月

■ 2023 年 1 月追加予定

■ 2023 年 1 月追加予定

■ 2023 年 1 月追加予定

異端の KARAS は闇夜に二度啼く

小説・異端の KARAS は闇夜に二度啼く

藍を塗り重ねたように。東の空は山向こうの底から一日の終わりを告げる。人間の棲む集落では陽の入り刻 (とき) のお祈り時間が来たことを告げるムアッジン…、お祈りの呼びかけ人が高い石の塔の上、アザーンを唱えはじめた。

人間がカッパドキアと呼ぶ地。夕日が西の山陰 (やまかげ) へと呑 (の) まれる様子はただただに美しい。

陽が高いところにとどまっていれば、太陽に焼かれた緑が山の麓で色濃くみせるのがこの地の日常でもある。村のはずれから東西それぞれの山にかけて広がる黄色い大きな花は人間がヒマワリと呼ぶ花の絨毯がつづく。

「ザッザッ…、カシャ、カシャ」集落の至る所に設えられた絨毯を織るための工場 (こうば) の音にヒマワリの絨毯が織り重なる。
　真っ青な空をいただき茶褐色の荒涼とした痩せた土地に黄色いヒマワリ畑がつづき、やがて緑を深め岩肌の露出が際立つ山へといたる…。
　人間が暮らす集落のあちらこちらに穿 (うが) たわれた黒い穴は、人間たちの巣への入り口だ。
　粗末な身なりの人間たちが膝を地につけ暗い穴ぐらから四足 (しそく) の生き物を想わせる如くにじり出てくる。
「カァ…カカァ…」そこかしこで班長が帰巣を告げる合図を鳴き上げると人間によるアザーンの声がかき消える。一斉に空へと舞い上がる我が部族。西の山の頂では太陽が一筋の線となりはじめていた。
　先導役が高いところで円を描きながら部族の動きを抜かりの無い目で追う。あらかたが空に舞い上がるのを観 (み) 止 (と) めると、東の山の麓をめがけて翼を羽 (は) たく。
　既に東の空は藍の深みを塗り重ねたように垂れ堕ちていた。天敵たちもこの日の狩りを切り上げ帰巣したのだろう、その姿は見止められない。

「爺ちゃん、まだ帰らないの？」
　孫のロリンが儂の頭の上、八の字を書くように飛びかいながらそう啼いていた。
「おぉ〜　ロリンか。儂はいつものように最後を見届けてからのんびり帰るとしよう。ロリンは先にお帰り。母さんも心配するじゃろう」
「爺ちゃん、今日は一緒に帰るよ」
　ロリンは深い紫を纏った羽を操ると、儂の横に降り立った。その羽色はさながら朝露に愛された山ブドウの色合いを想わせた。
「ロリン、今日もしっかりと食事は出来たかな」
　この日の首尾を訊ねる。
「今日は豆とヒマワリの種…それとモグラ」
「ほぉ〜、そうかモグラか。上出来だの〜」
「このところ雨が降らないから、人間の畑では作物が枯れはじめているからね。出来るだけモグラを狙うようにって…、班長が」
「そうじゃのぉ…、食事場所の集積所でもすっかり人間の食べ残しが少なくなっているようだからのう」この周辺は普段から雨は少なく乾いた土地だった。それが今年は「干ばつ」と云えるほど雨を落とさず、このころでは人間たちの生活にも疲弊が覗 (うかが) えた。
　頭上まで藍が深く垂れ込め、星たちがその姿を顕 (あらわ) しはじめたころ。白く、まあるい月はその姿を東の山の頂 (いただき) へと載せた。それはまるで生まれたばかりの鶏 (にわとり) の卵を想わせた。なんとも美味 (うま) そうに思える。
　地を這うように穴ぐらからにじり出た人間たちは、立ち上がると二本足で歩きながらひと際大きな穴へと吸い込まれてゆく。
　なんとも不思議な歩きかたをする生き物よ。

二本しかない足を交互に送りながら前へと進む。更に面妖なのは羽 (はね) のない腕を交互に振って歩くという行動だ。

飛べもしないのに腕を振るに何の意味があろうか。無駄に疲弊を深めるだけである。

燃える水が灯 (とも) されているのだろう。穴ぐらの中は明るく照らし出されている。人間たちも班で動く習性なのか、一つの穴ぐらには五十ほどの頭数が集い、川魚の稚魚たちの泳ぎを想わせるように皆が同じ向きに頭をそろえ、祈りを捧げている。歌うような声も漏れ出していた。

「爺ちゃん、人間は一日に五回も六回もあぁして集まって何を祈っているのだろうね…。空からの水が落ちて来るようにかな」

「先祖の言い伝えでは、昔は違う神様に祈りを捧げていたらしいがのう、今でも画の描かれた洞窟が残っているじゃろう」

「母さんが近寄るなと云ってた石の煙突みたいな処だよね……」

すっかり陽の落ちた西の空。暗くなった空を不規則に舞う闇の番人たちがその姿を見せはじめた。

闇の番人たちは音を立てて飛ぶことは無い。飛ぶ方向は予測できない。我が種族のものたちなら、ぶつかるような至近距離に至ってさえ器用に方向を変えた。

様子を見ていると人間たちがペリバジャと呼ぶ「妖精の煙突」の上に黒い塊がひとつだけ舞い降りるや「クワァークワァー」と我が部族とは異なる啼き声を発した。

「来たね……」ロリンは待っていたのか、そう云うと嬉しそうに自らも一声啼いてみせた。

「カカァー　カァー」

「これ、ロリンやめないか。儂らの支配時間はもう終わっているのだ」

妖精の煙突に降り立った黒い塊の頭が動いたように見えた。目が月明かりを吸って光ったように見えた。足が動いているのだろうか。

土を削ってでもいるような音がかすかに聞こえる。カサッ…カサッ…カリ…と。

「爺ちゃん、あいつ、どうして違う種族に交じっているのだろう」ロリンはそう呟いた。

「……　さぁ、ロリン。陽も落ちた。儂らも帰るとしようか」儂はそう告げると返事を待たずに羽をばたつかせ暗くなった空へと舞った。

「待ってよ、爺ちゃん」ロリンが後に続く。

空の上から妖精の煙突を振り返り眺めると、月明かりを浴びたその姿は真っすぐに西の空を見据え、右足で妖精の煙突の土くれを蹴っていた。それは「クワァークワァー」ともう一度啼く。狩りの始まりの合図だ。

スッと広げた翼に月が明かりを注ぎ込む。その羽色は濃い紫を湛え、夜露の寵愛 (ちょうあい) を受けた山ブドウの輝きを想わせるほどに美しかった。我が部族の神なる祖先、ムギンとフギンを想わせるほどに。ただ羽の形が儂たち部族、いや種族と違っていた。羽の先端が「くの字」に折れ曲がっているのだ。

儂はその羽の姿にあの者の生きすがらを観た思いを刻まずにはいられなかった。

不規則に空を行き来する種族「蝙蝠」達に向けての狩りの合図…、闇の番人たちの縄張り時間を誇示するように啼いたそれはあたりを睥睨 (へいげい) する。

※

帰巣すると部族の数を数えることが習慣 (ならわし) となっていた。トンビやタカをはじめとする天敵にやられるものも少なくないためだ。
「みなの衆、すまなんだの待たせて」
「父さん、わたしの班は無事でした」息子のキロンが安堵したように報告する。
「長老…　私のところでは二柱 (ふたはしら) ほど帰巣していません」次々に班長が報告をする。
「結局今日は七柱か…」疲れたように息子のキロンが呟くと、儂の後ろに居たロリンが口を開いた。
「カァー…、父さんきっと大丈夫さ、村に残って夜明かしをしているんだよ。明日になったら村で合流するさ」
ロリンは父や大人たちを気遣うようにそう明るく言葉にした。
「あのね爺ちゃん…、皆にも聞いてほしいことがあるんだけど」ロリンは大人たちの話を切り上げるように言葉をつづけた。
「なんじゃ……」幾分の苛立ちが嘴 (くちばし) に滲む。
「あいつ…どうして種族の違う中に居るんだろう。僕はどうしても気になるんだ。父さんや爺ちゃんは知らないの？ 母さんに訊いてもなんか…クワクワ、クワクワ云うだけで…埒 (らち) があかないし」
「これロリン、母さんのことをそんな風にいうものではない」儂は強く咎めた。
「ごめんなさい…」
　ロリンは素直な子だった。部族の他の子たちは皆の前で意見を云える子も少なく、見て見ぬふりをすることが常だった。云いたいことは裏山の「啼き捨ての樹」に誰が書いたものか判らぬよう爪で書く。あのものについても、変り者・異物と揶揄 (やゆ) することが精々だ。
しかし、孫のロリンは違った。あの「妖精の煙突」に留まる KARAS を変り者…異物…として扱うことは無かった。
　部族を纏める者として、それぞれの多様な個性を尊重できる生まれながらのリーダーの資質を備えているのだろう。
　息子夫婦は自分たちの子供ロリンの問いには答えなかった。
「……さぁ、明日も早い。自分の梢 (こずえ) に戻って寝るのだ」儂はそう皆 (みな) を促した。

　夜明け前、息子のキロンが血相を変えてわたしの梢を揺らした。
「父さん、ロリンが居ないんです。ロリンが」
あとを追ってきた嫁のニヒトが息子の後ろでクワクワ云いながら羽をバタつかせている。
「…いつからいないんだ？」
「わかりません。梢に戻ったのは一緒だったのですが、出がけ準備の合図を啼き上げようとしたところ、もう梢には居なくて…」
「……　村におるじゃろう。夕べ、誰も答えをくれないものだから…ロリンは自分で答えを探しに行ったのかもしれんのぉ」

「それは……父さん…、どうしたらいいのでしょうか、夕べは雲も深く垂れ込めてましたから…」
「キロン、お前の息子は利口な子じゃ。鳶 (とんび) が鷹 (たか) を生んだと云われるほどにの。仕方ないじゃろて。知る時が来たのなら抗 (あらが) うことは出来まいて。殊 (こと) 更 (さら) に事を荒立てぬことじゃ。ほれ云うてる間にも先頭が村に向かいはじめようて」　東の空、山の頂が白 (しら) んできた。

※

【あいつは僕と同じ種族の仲間だよ。なのに何故違う種族の蝙蝠と一緒に居るんだろう。
　今日こそ話を聞いてみよう。それにしても今夜の雲は重くて低いよ…。暗いよ…。方向が判らなくなるよ…。こんなに暗いんじゃ食事だってさがせやしないよ。夜は暗いから仲間だって見つけられやしない。なのにあいつはどうして闇の番人種族の蝙蝠たちと居るんだろ……。よぉし、今のうちに雲の上まで出てみよう。月があれば山の影も見えるだろう。山さえ見えれば何とかなるさ……。よし、雲の色が白っぽくなってきた。あと少し……。
　出られた！　山も見える。月は僕の味方をしてくれてる！　月が僕の真上だよ。星がたくさん出ている…、どれ程出ているのだろう。行きすがら数えてみようか……。
ム・ニ・ンサ・マ・フギ・ン・サマ…、イチ末裔。ムニン・サマ・フ・ギ・ンサマ…、ニ末裔…二十か……、チェッまだまだあるよキリがないや。でも空が暗くて静かだ。これならトンビやタカにも襲われることは無いだろう。
　爺ちゃん凄いよ、夜の月はあんなに白く光るんだ。空や山を飾るように散りばめられた星たちはあんなにも沢山あって優しく瞬く。
　あいつはずっとこの景色を見ていたのか。
　でも、食事はどうするのだろう。食事はみつけられるのだろうか……、僕だったらきっと無理だろうなぁ。この辺かな？ そろそろ雲の下へ降りてみよう。
　あっ！　ようし蝙蝠種族を見つけたぞ。もう少し南…、居たっ！　あいつ、また土を蹴ってる…。どうしよう…、直接隣に降りたら驚くだろうな。攻撃されるかもしれないし。蝙蝠たちも驚いて襲ってくるかもしれない……。しょうがないや、まずは上から声を掛けてみよう】
「カー、カカァー」
「なんだお前クワァー。何をしに来たんだ。お前たちは寝ている時間だろう？ 今は俺たちの支配時間だぜ」
「僕だけなんだけど、横に降りてもいいかな」
「好きにすりゃいいさ…でもチョット待てよ、仲間に何でもないっていう合図を送るから」
「うん」
「……クワッカー」
「ありがとう…凄いね、あんなに沢山いたのに一声で居なくなっちゃうなんて…、えっ？ 当たり前？　そりゃぁ同じ種族だったら分かるけど、君は僕と同じ種族じゃないか…、なのに一声で…」
「馬鹿馬鹿しい…、そんな話をしにきたのかい？ 種族だ部族だって執着するからいつま

でも争うんだろう？ 蝙蝠たちは自分たちから争いを仕掛けることは無いのは知ってるよな」
「うん……、いつも僕の種族がけしかけてるのは知っているよ」
「だいたい俺がこうして無事に育ったのだって、卵を置き忘れたお前たちの雌の代わりに育ての蝙蝠母が俺を温めてくれたお陰なのさ」
「エーッ！ 君は蝙蝠に育てられたの？」
「そうさ……、だから俺はお前たちを見る度に腹を立てていたんだ。でも蝙蝠母が俺に云うんだ。お前は神様のお使いの末裔なんだから心を広く持たなければね…って。だから俺も我慢することにしたのさ」
「神様のお使いの末裔？ それって、ムニンとフギンのこと？」
「あぁ。なんかそんな名前だったかな」
「じゃぁ、君 (きみ)、僕と同じ部族の子じゃないか…、僕はロリン。部族の長老の孫。君の名はなんていうの？」
「俺はベガ。俺の蝙蝠母は部族のシャーマンなんだ。結構長生きしてんだぜ」
「ベガ…、君の羽の色…、僕と同じ色だよね。でも、羽の形がチョット違うよね」
「あぁ…これか。自分で折ったんだ。何でかって？ 蝙蝠族の方向転換についていけなかったから、嘴 (くちばし) で銜 (くわえ) て折ったのさ。おかげで急旋回やホバリング転回も出来るんだぜ……」

※

東の空が山の頂を橙色に染めはじめた。村までもう一息だ。闇の番人たちが西の森に向けて帰って行くのが目に入る。

しんがりを飛んでゆくのはあの子だろう。少し曲がった羽の先を器用に使いながら右へ左へ上へ下へと飛んで行く。と、それは左へと急旋回をみせると滑空体制に入った。

早い！ フクロウが若い小さな蝙蝠を狙っていた。それは自らの体を矢羽根と化し嘴 (くちばし) からフクロウに体当 (たいあ) たりをしてみせたのだ。

流石 (さすが) の夜の知恵者、フクロウも堪らず大きな翼を翻し山に向かって逃げ飛んで行く。

「やりよるわい。どうやら育ての恩は返せているようじゃの」儂はひとり呟いた。

息子夫婦がロリンを見つけたようだ。

人間が妖精の煙突と呼ぶ岩の上、留まっているのがロリンだろう。息子夫婦はロリンの頭上で啼き叫んでいる。

「よさないか。無事に見つかったのだから良いではないか。あとは巣に戻ってからにすればよいだろう」

儂は息子夫婦のそばに行くと、咎めるように嘴をはさみロリンの留まる妖精の煙突に羽をおろした。

「爺ちゃんごめんなさい。心配かけて」ロリンは謝罪をみせた。

「心配をかけるようなことはするべきではないな……。それで、どうだった。目的は果たせたのかな」

「うん。面白かったよ。あいついい奴だったし頭も良くって、僕たちが知らないことをたくさん知っているんだ。でも、チョット変わったやつだよね……。あいつの羽が曲がっ

ている理由も分かったのだけど。それから…あいつ蝙蝠種族のシャーマンに育てられたんだって云ってたよ。で、ムニンとフギンの末裔だって」ロリンは一気にまくし立てた。
【そうか…、やはりそこまで知ってしまったのか…。どうやらあのシャーマンの蝙蝠婆さん…、上手に育ててくれたようだのぉ。さて、あとは帰ってからにしておくとしようか。どの道、按配 (・・・・) も (・) 頃合い (・・・・) じゃて。息子夫婦と話をしてから決めるとしようか】
「楽しかったようじゃの。良いか。その陰で心を痛める者たちが居たことは忘れるでないぞ。お前もムニンとフギンの末裔。智慧と記憶を掌 (つかさど) る使い魔の末裔じゃ。そのことをよくよく心に留めておきなさい。ほれ、飯じゃ飯の時間じゃ…、あとは帰ってからじゃ」
　そう云いながら目線を足元に移すと、自分の立つ足元の土が抉 (えぐ) れたように掘り込まれていることに気付く。
【ここはあの子が立っていた場所なのか…、何故…、何故ここだけが掘り込まれたここだけが黒く濡れている？ いや…魔坂 (まさか)…】
「うん。爺ちゃん。じゃあ食事に行ってくるよ」ロリンはそう告げると妖精の煙突を蹴り上げ空高く駆け上がった。
「ほう…、ロリンお前もか…」そこの岩肌は確かに湿り気を帯びていたのだが、登り始めた東の空の太陽が早くもその湿りを乾かしはじめる。儂は左足でその痕跡を隠すように掻きならした。
　ムアッジンが朝のお祈り時間の到来を告げるアザーンを唱えると、谷間には東の山むこうからの朝日が差し込む。あちらこちらで我が種族の啼き声が響いていた。食事の取り合いなのか、天敵にでも襲われているのか…仲間同士で食事を巡って争う姿も目にした。
　穴ぐらからは、人間たちが四足動物のようににじり出てくると飛べない腕を振っていた。
【おっ…　あれは蝙蝠種族のシャーマンの婆様ではないか…、あんなところで今頃何をしているのだろう。仲間はみな帰巣した頃合い。あの土の塔は赤ん坊を抱いた女の神様が描かれていた塔だ。なんで今頃あんな中に入ってゆくのか】後をつけるつもりは無かったが、ロリンとあの子のこともあり、塔の中へと入ってみた。
　飛び交うには狭かった。壁には人間達が描いた赤ん坊を抱く女の神様の姿や、人間の背中に羽をはやしたおかしな鳥 (とり) 種族 (しゅぞく) の画が描かれていた。
天井に目をやると、シャーマンの婆様が天上に足でつかまりぶら下がるように羽で顔を隠し休んでいた。
「婆様…、蝙蝠の婆様…、休んでいるところ申し訳ないが少し時間を貰えるだろうか」
「何だい、誰だいこんな朝早くから。わたしゃ今から寝るんだよ。こんな婆を喰ったところで、しわくて食えたもんじゃないよ。もう少し脂ののった餌を探しに行きな…」
「婆様、儂じゃよ、ドゥワじゃ」
「なんだあんたかい。どうしたのさこんな早く。ハハァ……、あれじゃろ…、あの子達のことで来たんじゃろ」蝙蝠のシャーマンの婆様は見透かしたように嬉々としてそう云った。
「夕べから今朝にかけて随分話し込んでいたからね、あの子達」
「婆様、あの子達がどこまで話をしていたか分からんじゃろか」

「相変わらずお前様たちは都合が先行するのぉ…、そうではないだろう。使い魔の末裔だか何だか知らぬが、常に気にするのは体裁と自分の都合ばかりじゃ」
　蝙蝠のシャーマンの婆様は歯に衣着せぬ物言いで儂を責めた。
「いやこのとおり申し訳ない。確かにあんたが云うように、儂らはあんたに借りがある。後にも先にもそれを抜きには話は出来ない。
婆様、ずっと天井を見上げていると首が痛くて仕方がない。チョット降りて来てはくれぬか…」
「爺さん。あんたなにかい、この朝日が昇って凡てを晒 (さら) し出す時間に、私に地に降りろというのかい？　　ネズミや蛇にでもこの老骨を差し出すつもりかえ？」
これはいかん。藪蛇である。
「婆様悪かった。今そこまで飛んでいくので許してほしい」
儂はそう云うと蝙蝠のシャーマンの婆様がぶら下がる天井付近の張り出しに身を折るようにねじ込んだ。人間たちが蠟燭 (ろうそく) を灯す場所なのか、足元が気持ち悪い。
「フン…、なんの用か知らないけどサッサとしておくれ。あたしゃ眠いんだよ」
「婆様…、まずはあんなに立派にあの子を育ててくれたことに衷心より礼を申し上げる。ありがとう」儂は頭を下げた。
「何を今さら言ってるんだい。元はと云えばお前さんの息子の嫁が巣への帰り間際、急に産気 (さんけ) づいて妖精の煙突の上で卵を産んだことがはじまり。嫁しかいなかったから抱卵できたのは一つだけ。もう一つの卵……、あの子を持ってはいけなかったのさ。そこに首尾よくあたしが通りかかったから抱えて温めてやっただけのこと……、それもあたしゃ、お告げを聞いていたから通りかかることもできた。
だけどね、ベガは本当にいい子に育ってくれたよ。今じゃあたしの部族の中でも皆に頼りにされて…。あぁ～判っているさ、いつかはあんたたちの元に帰る日が来るぐらいのことはね。だけど爺様、あたしゃね、口が裂けても云いたかなかったけどね。他の種族の手に塗 (まみ) れた KARAS の恐ろしい末路など」
　儂は嘴 (くちばし) を差し挟むことなく蝙蝠のシャーマンの婆様に話をさせた。儂らの種族は他の種族の匂いがついたものを受け入れることは無かった。卵なら母親自らが割る。雛なら父親自ら巣から蹴落とす。それが部族の暗黙の了解。
　一度蝙蝠種族の手が及んだものであれば、部族に戻るためには自ら戦い道を開く時を待つしかなかった。
　それがベガの宿命であり、双子兄弟のロリンとその親、キロンとニヒトの抱えた運命だった。
　いつの間にか人間の洞窟の中には明かりが灯されていた。壁に描き込まれた赤ん坊を抱いた女の神様の前では、蝋燭の炎が風に揺らいでいる。人間に羽をはやしたおかしな鳥種族が女の神様の脇を固める。明かりを吸った故なのか、暗がりに浮かぶそれらの姿はただただに美しかった。儂はその美しさにしばし見入った。婆様の存在を忘れたように見入った。いや祈ったのかもしれぬ。
「さぁ、爺様。あんたどうするつもりじゃ。あんた自分で判っていると思うが、もうそれほど長くは飛べんよ。それとあんたも薄々気づいておるじゃろうが、あの子達…、数百年ぶりの生まれ変わりぞ」

「あぁ……、少し前からなんとなくな。今朝、はっきりと判ったわい…、飛べなくなることも、あの子達のことも……。婆様、どうじゃろう、ここはひとつ儂に任せてくれんか」
「任せ云われて落としどころも判らずに、任せた云えると思うてかこの戯 (たわ) けKARAS め」
「相変わらず厳しいのぉ〜(笑)　こういうのはどうじゃろう……」

※

　女の神様が描き込まれた洞窟をあとにすると、外では太陽が頭上に昇っていた。薄くなりはじめた羽を広げ地を叩くと体が浮いた。
　祈りを終えた人間たちが頭を寄せ合い話し込んでいる。どうやら干ばつによる被害について相談しているようだった。
【だいぶ酷いようじゃのぉ。人も死にはじめているという話も聞こえてきている。儂たちの部族はそこまでではないが…、他の部族では人の死肉をついばんだ KARAS が人間に殺されたという話も伝わり始めている。ほかの土地の人間たちの間では、鳥葬という儀式もあるらしいが、儂たち種族は厄介者のようだ。さて、なんとか雨が落ちてくれればよいが】
　空の上から川の水や用水路の水の具合を眺めても、渇水は明らかなようだった。
【これは部族で餌場についても相談しなければならぬかのう。山裾の森は今のところ水の心配はない。が問題はこの人間たちの生活でもある。これまで持ちつ持たれつでやってきた一面もある。ネズミやモグラといった作物に害なす動物が減ったことに、一部の人間の間では木彫り KARAS を祀 (まつ) り上げ、信仰の対象として祈りを捧げるものも居る。雨が欲しいところだ】
　日が陰ってきた。地面から空に向けて吹き上げる乾いた風に緩みがみえはじめる。雲が広がりはじめていた。風が変わる……。地面からの風が緩むと羽を叩かなくてはならなくなる。儂のような年寄りには些かこたえるのだ。
「どれ、一度降りて休むとしようか」目線を地上に移し着地するに手ごろな場所を探した刹那 (せつな)、儂の頭上を二つの影がかすめた。
「グガワァ…、いかん！ 抜かったわ！」声に出し方向転換を試みるも、二つの影がかすめた際に大きく強い羽が儂の羽を折ったようだった。自由がきかない。失速する。このままでは乾いた谷間に体を打ち付ける。方向は選べない。まずは水平に、少しでも怪我を小さくすることが……。儂は傷んだ羽を我慢して広げ、かすめた二つの影を目で追った。
　いた。あれは…鷹だ。そしてもう一つの影は……、雲間から覗いた太陽を背にしたそれの大きさは空を駆け降りる羽のある馬の如くに見えた。まるで金色の鬣 (たてがみ) をもつ馬だ。
「あれは……」羽を背負った馬…そう口に出しかけると、孫のロリンが大声をだした。
「爺ちゃぁーん…大丈夫―」少し離れたところから、ロリンが儂の元めがけ飛んできた。
「ロリン…儂は大丈夫じゃ。羽を少しやられたがの」儂の目は空でまみえる二つの影を追っていた。
「爺ちゃん、もう少しだ。あそこに降りよう。右だね、怪我した羽は右だね？　よし、僕が右を支えるから、爺ちゃんは左の羽で舵を取って！　いくよ！」
「すまんのロリン」

返事をしないロリンをみると泣いていた。嘴をギュッと噛み締め泣いていた。
地面へと着地し折れた羽をたたむと、二つの影を求めるように空を見上げた。
鷹はその姿を消したようだった。太陽に照らされた山ブドウの色合いを想わせる羽…、その羽の先端はくの字に曲がっている。
【さっき儂が見たものは一体…】そう考えていると、それは儂たちをめがけて着地した。
「ベガ！　どうしてこんな時間に君がここに居るんだい？」ベガはそれには答えず儂に言葉をかける。
「爺さん…　大丈夫かい？　危ないところだったな」そう云うベガの体中の羽は戦いの激しさを物語るようにささくれ立っていた。
更にベガは左目をつぶされていた。儂を助けるために自分の目を差し出したのだ。
「面目ないのぉ。ロリン。儂はベガに助けられたのじゃ。ベガ、済まぬ。目を潰されたか」儂がそう告げるとロリンは嗚咽を漏らし泣きはじめた。
「そう。良かった。ありがとうベガ。目はどうなの？ 見えないの？ 怪我しちゃったの？」
「なぁに、二つあるうちの一つが減っただけさ。ちょっと痛いけどな、俺の婆様が帰っていないって皆心配してたから探しに来たんだけど、そしたら爺さんが鷹に狙われてるのが見えたから……。爺さんがロリンの云う長老かい？　俺のシャーマンの婆さんとも知り合いなんだってな…」
「うん。僕の爺ちゃんだよ」ロリンが告げた。
「……ベガ、儂はお前の爺さんでもある」儂は告げてしまった。蝙蝠のシャーマンの婆様と交わした作戦など何の役にも立たずに。儂は告げていた。
「爺さん？」「爺ちゃん？」
「そしてお前たちは双子の兄弟じゃ……」
「なんだいなんだい騒々しいねぇ、カァーカァークワークワー。誰だい蝙蝠の眠りを妨げるのは……、おや、ベガ。何してるんだいこんな時間に。お前、その目はどうしたんだい！」
「大したことねぇよ。それより、いつまでも帰ってこない婆ちゃんを探しに来たんじゃないか」
「そりゃ済まなんだねぇ。にしてもその目…おまえ潰れちまったねその目…。おや、そっちは爺さんとお孫さんかえ、なんだってんだよ皆でこんな時間に……、爺さん、あんた魔坂 (まさか)……」
「婆さん…申し訳ない。たった今凡てを話してしまったところじゃ。のっぴきならない事情が降りかかってのぉ、本当にすまん。それからベガの目じゃが、儂を鷹から助けるために怪我をしたんじゃ。許してくれ」
「ふん。どうせそんなところじゃろう。それも KARAS の勝手というものさ。さて、ではこれからどうするかという話には、私も混ぜてくれるんだろうね爺さん」
「僕たちが兄弟ということは、シャーマンお婆さん。あなたは僕にとってもお婆ちゃんです。だから…僕は爺ちゃんと婆ちゃんに云いたい。まずは僕とベガで話をするよ」
「おやこの子。爺さん、血は争えないねぇ。しっかり自分を主張する子じゃないのさ」
「俺もロリンと話をしてから道を探す」
「この KARAS どもと来たひにゃ、好きにおしよ。ただベガ判っているね…、楽 (らく)

じゃないよ」
「もちろんさ。俺は婆ちゃんたちも守る」
ベガはそう云うと足で地面を掻き削っていた。
　どうしたことか、そのベガの足元からは水が滾々 (こんこん) と湧きい出、たちまち小さな水たまりをつくりはじめたではないか。。
【ほお…、やはり。この子の足はグングニルの杖か。さしづめ湧き出す水はミーミルの泉となるやもしれぬ。この子達がムニンとフギンの生まれ変わりであるのなら自分の目を犠牲に命あるもの達の役に立つのも定め。もう少しゆく末を眺めてみたいものじゃて】
　三羽の KARAS と一匹の蝙蝠のやり取りを眺めていた人間たちが水たまりを見つけて騒ぎだしている。飛べない腕を振りながら。
　儂は折れた羽を引き摺り、蝙蝠婆さんとともに「赤ん坊を抱いた女の神様」の穴ぐらへとその身をあずけた。

了

二千二十二年　八月二十三日　脱稿　二千二十二年　北日本文学賞応募作 (予選敗退作品)

鬼灯 (ほおずき) の実が、落ちるまで

エゴンシーレ作　ほおずきのある自画像

タイトル　■鬼灯 (ほおずき) の実が、落ちるまで
画の詳細　■作　エゴン・シーレ　1890-1918 享年 28 歳　分離派・象徴派・表現主義
　　■画　「鬼灯のある自画像」
　　■収蔵　オーストリア・ウイーン　レオポルド美術館

「たっちゃん…この画家さん、どうして自画像ばかり百枚も描いたのかしら…どんだけ自分のことが好きだったのよ」

　玲子は、そう云うと半ば呆れたと云わんばかりの笑いを達也にむけた。

　オーストリア・ウイーン、旧市街を取り巻く環状道路。リングの一本外側にあるレオポルド美術館に二人の姿はあった。

年の初めの元日。ウィーンフィルによるニューイヤーコンサートでも知られるウイーン学友協会ホールからであれば歩いて十分ほど、北西に位置した美術館であり周辺はさながらアートコンプレックスの様相を見せるいっ画。様々なジャンルの美術館が集まっている。

陽の沈むこと無き国・神聖ローマ帝国の都ウイーン。

高く青い空にひと際映えるテレジアンイエローに染め抜かれた宮殿の荘厳さは観る者に深い感慨を与え、否応なく往時を偲ばせる。街なかではそこかしこに設けられた公園がエントランスを無料で開放し、色とりどりのバラたちは甘酸っぱい香りを漂わせ見る者を誘う。

音楽と哲学・文学。絵画と伝統工芸という文化が独自の発展をみた街であり、今日の芸術文化の国際的ベーシックを築いた街としての評価も不動だ。

一方で、無類の酒飲みが多い街という一面も見せる。ワインとそれを供する居酒屋 (ホイリゲ) の存在も知られたところであり、夕方ともなると老若男女問わずにこのホイリゲの席を埋めるのが日常だ。

穏やかなドナウの流れにナトリウム灯がオレンジ色の明かりを落とす。夜の帳が落ちはじめたころ。街中は一斉にオレンジに染まる。

旧市街のように景観保存条例が機能した街なかでは、建物に使われる色が限定的であるが故、街全体がナトリウム灯の色に染まる。その様子はさながら中世返りを想わせる。

夜のドナウは音もなく静かに流れ。観光遊覧船なのだろう。ブッフェディナー付きのホイリゲクルーズなども観光客に人気を博しているようだ。

そんな街に日本からの旅行者・画家　益子達也 (四十四歳) と絵画ギャラリーオーナーの宗川玲子 (三十七歳) が訪れていた。

「まぁ、随分病んでいたという話は残っているよね」達也は言葉をつづけた。

「今の時代なら、アルファベットの三文字、四文字で顕すことが出来るような病質は抱えていたらしいからね。よく云われることだけど、黒胆汁気質が勝ちすぎた画家だろな。まぁ、どんな芸術家でも少なからずの異物は抱えているからね…　そうそう、ところがさ、なんか無茶苦茶女性にもてたらしいよ」

達也は、シーレによる自画像【ほおずきのある自画像】を眺めながら玲子の問いに応えた。

「あっ、モテたの？　へぇーモテたんだぁ…　、自画像ばかり百枚って、チョットなんかキザでナルシストかと思ったけど、この自画像観てるとチョット違う感じもするのよね……　なんか影って云うか、コントロールできない自分を持て余しているようで……

　なんか鬼気迫るっていうか…　」玲子は持ち前のギャラリーオーナーとしての推眼を披露してみせた。
「ちなみに、たっちゃんは、何枚ぐらい描いたの？　　自画像」
「吾輩かぁ…　そう云えば、吾輩は自画像は描いていないなぁ、あれっ、云ってなかったっけ」
「知らなぁい…　初めて聞いたわ…　」
　達也はわざとらしく後ろに反り返りながら「吾輩」と自分を呼んでみせた。正確に云うのであれば、描かないと決めている…　が正しかった。
理由を問われるのが煩わしい…　なんとか遣り過したい気持ちが働く。

【エゴン・シーレ】オーストリアが生んだ近代画の巨匠として知られ、その才能を高く評価したクリムトの庇護のもと作画に没頭。象徴派、分離派、表現主義の画家として知られた存在であり、多くの作品を遺したが、千九百十八年、二十八歳という若さで鬼匣 (きばこ) に納まりをみた。
レオポルド美術館は、世界屈指のシーレコレクション美術館として近代美術愛好家に知られる。

「そうなんだぁ…　欲しいなぁ…　益子達也先生の自画像…　多分シーレは自分で描いた自画像あげたと思うのよ。愛する女性 (ひと) に…」
「……　いやいや待て待て、玲子ちゃん、君には絶対にあげられないよ」達也はシリアスにならぬよう、お道化た調子で玲子に告げた。
「エーっ、なんでよぉ…　酷いじゃないのよ、それっ」
「だって、売っちゃうだろ？　　ギャラリーに来たお客さんにさ。自画像描いて、君にプレゼントして、それを売られちゃ吾輩はタダ働きだろ」
「売らない売らない。絶対に売らないから、自分の部屋に飾るから、お願い一枚描いてよ。私の・た・め・に…　」

【それが嫌なんだよ。ずっと見られているようで、監視されているようで…　これは情を交わしたパートナーに限ったことでは無く、自画像が他人の元にあるということが気色が良くないんだよ】
達也はそう自問していた。

「……　ところで、柳絮の才高しと、高名な先生たちの憶え目出度き玲子先生に訊きたいんだけどさ」
「なによ急に。また話をはぐらかす気でしょう。描いてね。描いて頂戴」
玲子は画に向き合ったまま口を尖らせていた。
「この画、鬼灯 (ほおずき) が描き込まれているけどさ、なにか意味があると思うんだよね…　例えばアナグラムとか、アトリビュートみたいな。ちなみに、花言葉わかるか

なぁ」
「そう！　そうなのよ、私もそれを考えていたのよ、だって、鬼灯ってさ、日本では、お盆のお花、供花っていうイメージが定着してるじゃない、だから…　」
「ちょっと待って玲子ちゃん。君は今、日本って云ったよね…　、云ったわよって…　そう開き直られちゃ困るけどさ…　、鬼灯を、お盆の供花にするのは七月盆の関東地方が主立っていて、八月盆の関西地方では、鬼灯は殆ど使わないんだよ。だから、七月九日、十日の浅草寺ほおずき市や愛宕神社のほおずき市みたいなものは関東だけだし、関西にはないんだ」
「えっ、関西ってほおずき市…　ないの？　関東だけ？　なのになんで、ウイーンで鬼灯なわけ？　ウイーンにお盆ある？ (笑)　」
「飛ばし過ぎ、玲子ちゃん (笑)　だから花言葉を訊いたんじゃないの」
「なるほどね、チョット待ってね調べてみるから」玲子はそういうとスマホを取り出し検索をはじめた。

【どれほどこの画の前にいるだろう。他にも観るべき画はあったものの足が進まず、『ほおずきのある自画像』の前から動けないままだ。そもそも日本人は鬼灯を日本のものだと思ってはいないだろうか。欧米アフリカアジアと広く分布しその種類は百を超える。お盆の供花はもとより、風鈴とセットで夏の風物詩として、赤や緑の鬼灯の蕚 (がく) を捲り上げ、擬人化した鬼灯人形を作ったりと、世界中で俗文化風習との馴染みは深い】

「あらっ…　たっちゃん、そう云えば、ほおずき市、もう来月じゃない…　早いわねぇ…　にしても、ほおずき市が関東だけなんて…　はいはい、花言葉よね花言葉。　あのねいくわよ、嘘、偽り、欺瞞…　なんかチョット重いわねぇ…　それとぉ…　不思議…　私を誘ってください……　そして…　心の平安…　って、なんなのこれ？　私はやっぱり百八本のバラだわ…　」
「アハハ……　シーっ！　ごめんごめん、美術館だった。いや、でもその花言葉、何だろう笑えるよね傑作じゃない？　」
「なんか、支離滅裂って感じなんだけど、多分、日本とオーストリアで花言葉が違うのよ…　」
「いや、殆ど同じなんだよ。というか、花言葉がヨーロッパから日本に伝わってきたのは明治に入ってからだからね。日本では、文人芸術家の与謝野晶子が纏めたということらしいけどさ。だから殆ど同じと思っていいんだよ」
「でも意外よね、死に関する言葉は見当たらないもの…　」
「うん。そうなんだけどさ…　その花言葉を口にしながら、この自画像を観てごらんよ…　」達也がそう告げると玲子はシーレの自画像に向き直り花言葉を唱え始めた。
「嘘…　偽り…　欺瞞…　不思議…　私を誘ってください…　心の平安……　お盆…」玲子は三度ほどその呪文を唱えた。
「あぁ…　なんか夜に鏡が見られなくなりそう」

「それは違う呪文だろ (笑)　　で、どう？　　なんか感じた？　　」
「うん…　分かったと思うわ、多分。ただ…　主体が自画像なのか鬼灯なのかという疑問が大きくなるわよね…　きっと。でも、シーレのあの上からの目線…　分かるかな君たちに…　そう言っているように感じられたのは花言葉を調べたお蔭かも…　」玲子はそう告げると、もう一度画に向き合い花言葉の呪文を唱え始めた。

　あごを左横に突き出し、左斜め上から見下ろしたシーレの自画像の横には、枯れた葉を数枚だけ枝に伴わせ、真っ赤な鬼灯が三個、枝の下を埋めている。どの鬼灯も口を割ってはいない。シーレの自画像も口を閉じている。時に擬人化のアナグラムやアトリビュートとして用いられる鬼灯。玲子と達也は暫くその画に対峙した。

　レオポルド美術館をあとに外へ出るというと、十八時だというのに陽は西に傾いたばかりのように見えた。濃い藍に、橙を暈かし広げたようなウイーンの空には鋭利に研ぎあげられた三日月が白く馴染みを見せていた。
「随分細い三日月ね…　あんなに細い三日月を観た記憶がないわ」
「エンジェルカウチ…　」
「あぁ～なるほどね。なんでもエンジェルつければいいと思っているでしょう (笑)　」
「……　……　グルグルしてやるよ」
「えっ？…　」
二人はいつの間にか学友協会ホール前の広場まで歩いていた。
「だから、グルグルしてやるよ」
「やぁーよ、こんな所で…　していらない。恥ずかしいじゃないの」
　達也は玲子の言葉が終わるのを待たず、手を引き寄せると、左手を腰に回し、右腕を脇の下から背中にむけて差し入れ、グッと頭上に抱え上げ、ゆっくり回り始めた。
　最初こそ玲子はケラケラと嗤いながら「わかったからもういいから」と抗いを見せていたものの、慣れて来たのか目を閉じると達也の手に体を預けていた。
「たっちゃん…　エンジェルカウチが廻ってる…　」
「吾輩は目が廻ってきたよ…　」
「ダメ…　もうちょっとだけ……　ねえ…　東京に帰ったら自画像描いてね、私に。鬼灯の実がおちるまで……　に　」
【鬼灯の実って落ちるのか…　確か…　枯れて網目模様になった鬼灯を網ほおずきとか、透かしほおずきとか云ったはずだけど。それでも鬼灯の赤い実は落ちずについていたはずだけどなぁ…　玲子はそれを知っているのだろうか、いやこれだけでは済まないだろう…　自画像は始まりで侵攻の狼煙か、次は多分…　マンション買ってか】

「たっちゃん…　鬼灯の実って食べたことある？　　そう…　子供のころに私もあるけど…　赤ちゃんできたら食べさせちゃダメよ。流産しちゃうから…　」玲子は達也の腕

に身を任せながら頭を後ろに仰け反らせると、白く薄っすらと汗を滲ませたデコルテを露にそこまでを言葉にした。

　達也は危なく転がりそうになるのを堪えると、徐々に回るスピードを落とし、やっとのおもいで止まった。止まると、ウイーン学友協会ホールの広場の真ん中、大の字にひっくり返り、深い呼吸を繰り返しながら藍が深くなり始めたウイーンの空を見上げた。
　空にはシーレの「ほおずきのある自画像」がぽっかりと浮かんでいるように感じられた。達也は自分でも意識せぬままに呪文を唱える。
「嘘、偽り、欺瞞…　不思議…　私を誘ってください…　心の平安…　お盆…　お盆…　？」
シーレの見下ろす目は、まるで達也を見透かしているようにすら感じられた。
　ふいに視界が暗く遮られる。
「ねぇ…　起きて…　こんな所で寝てちゃ…　何？　　なに喋ってるのよ？　　」
　覆いかぶさるように、玲子は達也の顔に自分の顔を近づけると唇を重ねた。達也は玲子の顔を両手で挟むと深い口づけを与えた。

　【鬼灯の実が落ちるまでにって…　】
達也の頭の中、網目だけになった鬼灯にしがみ付いた赤い実が、その輪郭を次第に擬人化しつつあった。

了

作品の詳細

2022 年 6 月はじめに校了、光文社 6 月末日締め切りショートショートコンテスト「テーマ・ゲーム」にエントリー。残念ながら企画版元・光文社様の公募作品に対する扱い姿勢と、筆者の考える価値観が相まみえないことを確認するに至り、結果をまたず自作をここで公開することにした。
　ちなみに書き記しておくが、コンテストの選定基準について物申しあげるような、不遜なことを申し上げる気はない。あくまでも業務上の作品扱い姿勢に対する価値観である。

さて本作だが、六月に書いたものであることからもご理解いただけるように、7 月、8 月

のお盆 (旬) を意識し、中年の男女の “ゲーム” 的切り口を炙り出し、エゴンシーレの “鬼灯のある自画像” を触媒として大人の都合を滲ませた作品である。

このコンテストのテーマ「ゲーム」という言葉はどこにも使っていないことが象徴的であり、読みようによっては「ゲーム」を感じさせる散りばめられた幾つかのプロットからゲームを感じられるようにしてあるが、ストーリーを通じて「結局はゲーム」を読ませる仕立てとしたつもりである。

そもそもテーマの言葉を作品の中で私が使うことは無いのが私流。

ショートショート「夢殿」第二形態　2021 年秋版

不染鉄　作　「夢殿」

画の詳細　■作　不染鉄　1891-1976 享年 85 歳　接近と俯瞰・克明な描写と大和絵の融合

■画　「夢殿」　昭和 40 年から 42 年の作品

■収蔵　個人収蔵

ショートショート「夢殿」第二形態　2021 年秋版

　斑鳩の地を濡らす秋の長雨は糸を引くように。伽藍周辺でも季節変わりの雨が途切れることなく降り続く。

雨水に染まった玉石が、今や濃い鼠色を纏い微動だにしない。
白地に薄く藍を溶かし込んだ「石」本来の姿は、柔らかな日差しさえあれば、訪れる参詣客の足元、心地よい旋律を奏でるに一役買っていたものを。
それがこの処の雨が禍 (わざわい) してか、参詣客の足もめっきり遠のいてしまったようであり、一日の大半が「人っ子一人いない」様子を見せていた。
それでも、こんな折ですら毎日毎日同じ時刻に通い来る者たちもいる。
信心深く、毎日来る度に必ず手を合わせ、二十分からお参りしてゆく近所の婆様、境内に続く参道の傍らで茶店を営む主人たち。そしてもう一人。午後の三時を過ぎた頃、必ず顔を出す小柄な中老の男。さながら天と地が繋がった合図を思わせるような、雨をおとす空も鼠色に染まり切った中、馴染みが顔を見せに来る。
経つ刻を忘れるほどに眺むれば仏の教え遷 (うつ) す秋霖。(※筆者)
九十九 (つくも) に及ぶ白糸が如き雨垂れは、救世観音菩薩の功徳さながら、現世における数多の患い事から救済を試みる蜘蛛の糸にも相似して、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありという不思議な感覚に陥ることがある。
無の境地入り口に誘 (いざな) われ「さて、この先どうする。進んでみるもよし、退 (ひ) いてみるもよし」と、突きつけられてもいるようで、修業の身にはどうにもハッとさせられる。

玉石の隙間を埋めるように、地面からは雨水が浮かびあがる。
雨は間断なく玉石を打つが、雨音は仏性に吸収をみたようだ。

遠くの方から聞こえてくる、時を告げるチャイムは三時を知らせていた。今また一人の中老の男が、長靴を履き、纏わり憑く雨水すら慈しむように伽藍むこうへやってきた。
静かに歩く。気付かぬうちに踵やつま先で雨水や玉石をいじめることがないように。雨水や玉石の身の置き所が変わらぬよう、傷つかぬよう。
と、歩みを止めたと思いきや、膝を折りながら長靴に纏わり憑く枯葉を剥ぎ取り眺めはじめた。
男は、傘の高さまで腕を挙げ伸ばすと、枯葉を手放してみせる。
濡れていたが故か。揚力を持たない枯葉は、男の手を離れた途端失速をみせ、鼠色した石たちの元へ戻ってゆく。
枯葉を跨ぎ、傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩いてくる。
手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもない。ただひたすらと傘を手に、こちらを向き、伽藍むこうに佇む。
哭くわけではなく憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。
男の気配がけぶること無き様子からは、間も無くの雨上がりを予感させた。

「また来ているのか、あの御仁　」
　「・・・・その様でございます　」
「寂し気よのぉ・・・・・・　」

「憂鬱が滲んでおりますか・・・・　」
「うむ。しかし救いを求める風ではなし、利益 (りやく) を求める風でもなしよ　」
「では何故あって、このつめたい秋雨の堕ちる中、通い来るのでしょう　」
「・・・・云うてみるなら、そこ元達と変わり映えはない。というところか　」
「・・・・・・そうかもしれませぬなぁ・・・・　」
「近づいて来ぬな・・・・　」
「・・・はい。近づいて来ませぬ・・・・　」
「どれ、あかりを灯してみよ　」
「・・・・・・如何でしょう　」
「うむ・・・　」
「・・・・近づいて来ぬな　」
「・・・・・・はい。近づいて来ませぬ・・・・いつもの様に　」
「そのうち来るだろう。とき、未だ熟せず慌てることは無い　」
「・・・・慌てることはありませぬなぁ・・・・　」

南の空の雲間、横一線の光明が射す。それはさながら雲を割る如き存在感をみせている。
男は足元に目をやるや、つま先を器用に使いながら玉石を転がし始めた。転げた玉石はぶつかり合いながら、あらぬ方向へと転げてゆく。猫に弄ばれる小さなネズミが方向を変えながら逃げ惑う姿にも似てみえる。
傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせる。踊っているようにもみえ、踊らされているようにもみえた。
「あやしておるわ」
「あやして、おるのでございますか。誰をでござ・・・・・・　」
「・・・・・・寂しげよのぉ・・・・　」
「はい。・・・・寂しげにございますなぁ・・・・　」

帰途につくのか。男は、細く絞った秋雨のなか、背中をみせた。
南の空から射し込んだ光明が、濡れた男の背中を照らし出す。
温かく、柔らかであり、この世の患いの凡てを癒す功徳を授けるように。今日も又、手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもなく、男は静かに夢殿を後にした。

作品詳細
2021 年の秋に仕上げた夢殿の第二形態である。粗削りであり取説的であり、言葉足らずでありカオスが覗えるもののベースとして観た時に手を入れた後には何とかなりそうな気配もある。

この夢殿、第一形態を書いたときに我がブログで書いたことだが、一つの題材を通じ、様々な書き方が出来るようになってみたいとしていた。
今にして思うなら、第四形態の仕上がりをみればその思いはなんとなく踏襲できているのかもしれない。
400 字詰め原稿用紙六枚の作品

夢殿・笑うひと泣くひと　第三形態　2021 年 12 月版

タイトル■夢殿・笑うひと泣くひと　第三形態　2021 年 12 月版

細密緻密に描かれた秋雨の中の法隆寺・夢殿。雨だれは突き出した吉野の葛切りを想わせるほどに太くしっかりと九十九に及び描かれている。画の中央に夢殿を配し、両脇から前面にかけては雨を描く。雨に見入るとさながら下から昇って行くようにも見えてくる。夢殿の後背上部には横一条の光明が描き込まれ、間も無くの雨上がりをも予感させる。また夢殿の正面障子扉の中央は極めて巧妙に、緻密に障子を中から照らし出す明かりがほんのり描かれている。それはさながら鉄の魂の置き処とでもいうようであり、不染鉄の亡き細君への思慕を顕したようにすら思える。
「淋しいのだから淋しい画を描こうと思った」不染鉄

画の詳細　■作　不染鉄　1891-1976 享年 85 歳　接近と俯瞰・克明な描写と大和絵の融合

■画　「夢殿」　昭和 40 年から 42 年の作品

■収蔵　個人収蔵

タイトル■夢殿・笑うひと泣くひと

斑鳩の地を濡らす秋の長雨は糸を引くようだ。伽藍周辺でも季節変わりの雨を途切れることなくみせている。雨水に染まった玉石は濃い鼠色を纏ったまま微動だにせぬ。
　柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ「石」本来の姿は訪れる参詣客の足元で心地よい旋律を奏で聞かせるに一役買ったはずである。さながら天と地が繋がった合図を思わせるようで雨をおとす空も同じ色か。

「経つ刻を　忘れるほどに　眺むれば　仏の教え　遷す秋霖」

　九十九 (つくも) に及ぶ白糸が如き雨垂れは救世観音菩薩の功徳さながら、現世における数多患い事からの救済を試みる蜘蛛の糸にも相似して、時には下から上へ降っているようでもあり、昇ってゆくようでもありという不思議な感覚に誘われることがある。
　法性の学び入り口に立たされて「さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と、突きつけられてもいるようで修業の身には些かハッとさせられる。

　私がここに坐してどれほどの月日が経とうか。幾度の秋を迎え送ったことだろう。秋雨に眺め入ると現と夢を行き来する。鼠色に変容をみせた玉石の隙間を埋めようとでもするのか、地面からは雨水が浮かびあがる。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つもののここを取り巻く仏性が幸いしてか静寂に馴染みをみせていた。
　今また一人の中老男がいつもの様に憂鬱を滲ませ長靴を履き纏わり憑く雨水すら慈しむように伽藍むこうへやってきた。
　この男、名を不染鉄というそうであり、どうやら画を生業とでもするのか足しげく通い来ては法隆寺や夢殿の画を描いていた。
　お師様の御言葉によると、東京小石川 (現在の文京区) にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅であるということではあったもののそのくせ背筋の伸びたところは覗えない。時折地元の女子大学生数名を従えてくることもあったが、その気配、引率からは甚だ遠くいつも俯き加減に歩く様子からは引率されている気恥ずかしさと按配の悪さが滲んで見えた。

「おぉ、今日も来たか」
「はい。今日も来たようにございます」
　何やら、心なしか待っていた如く聞こえるのは気のせいではないと感じられた。降り続く雨模様も手伝ってか確かに訪れる参詣者は少ない。それでも毎日通い来る者もいないわけではない。近所に住まう信心深い質屋の婆様しかり、境内に続く茶店の主人ども。
　博打にでも行こうとするのか、数人で連れ立って来ては賽銭を放り込み、柏手を打っ

てゆく埒なき者ら。それぞれに、それぞれの願いを届けにやってくるのである。

「…うむ。どうやら今日もこれと変わりはないか。何よりよ」
「…お師様には、随分お気に留めておられるご様子」
「悲しそうではないか。今にも泣き出しそうに見えてのぉ」
何故お師様は泣き出しそうなあの者を見留め嬉しそうにしておられるのだろう。別に意地の悪さをみせているわけではないだろうに。

「憂鬱が見えますか。今日も画は描けぬのでしょうなぁ。ここ三日ほどは手ぶらで通い来てありますゆえ」
「画か……　道詮、そこ元は覚えておるだろう。まだ私が木綿布でグルグル巻きにされていた頃のことを。もう何年になろうか」
「……今が昭和という元号の四十二年だそうですから、あの異人の手による開廟から八三、四年も過ぎました頃にございますか。忘れよう筈もございません」
「もうそんなになるか……　よう笑う御仁だったのぉ、あの異人」
「はい。祟りを畏れた寺の僧たちが、みな蜘蛛の子を散らしたようにその場を離れる様を見て、雷も落ちぬ火も出ぬと大笑いしておりました……　」
「そうであったのぉ。確かあの御仁も画業に精通していたはずであるが…　」
「はい。何やら東京美術学校なる学び舎を作るにも奔走し、副校長の職にもあったと聞こえておりました。あの時、ともに来ておりました岡倉天心なる者が校長を務めていたという話でございました」
「道詮、そこ元はいまだ現に明るいようだのぉ」
お師様は、からかうようにされど慈愛あふるる笑みを湛えみせると憂鬱を滲ませ向こうを歩く中老男を見やった。

「お恥ずかしい。ただ…　恩人ですが故のこと」
「うむ。この国はその恩をけして忘れてはならぬのう…　」
「はい……　」
　そう。あれから八十年以上が経ったのか。早いものだ。あの折は明治と云われる元号だったか。
　確か、明治は十七年初夏の昼下がりのこと……
　お堂前が俄に賑やかとなりだし、何やら押し問答をしている様子が堂内まで伝わってきた。修行の僧どもが徒党を組み堂前に人垣を作ったであろうことは、扉障子に映り込んだ影からも窺い知れた。盛んに「祟り」の言葉を口にしていたのを聞くと、どうやらこの『夢殿』を開けようとしているらしい。二百数十年の時を経て陽の目を拝むというのも何とも楽しみであり「それ頑張れ、やれ開けろ、負けるな」そう願ったことを想い出すと己が修業の足りなさを反省もし情けなくも思ったことを思い出す。

さぞかし錆びついていたであろう錠前を、ガチャリガチャリと解錠しようとする音が堂内に響く。扉もガタガタと震えていた。修行の僧と思われる「どうかお待ちください」という懇願空しく程なくすると鍵が解かれ扉が開けられた。

寺の僧どもは祟りを畏れ誰一人として開扉の前にはいなかった。逆光でよく分からぬが三人の男が立っていることだけは観えた。

男達は開け放たれた扉口で靴を脱ぐと草履を取り出し履きはじめた。

「入ってくるのか……」そう考える間もなく三人の男は堂内に歩みを進めると行燈片手にうろつき始める。

なんと、一人は日ノ本の青年だったがあとの二人は異国の者ではなかったか。肌色は白く、髪の毛は行燈の明かりを吸ったように金色の艶を放っており、暗がりに映える顔つきはぼんやりとした明かりが顔の影を作り出しているのだが、その鼻の影の大きさに驚いたものだった。

中には一人ぐらいは居るものである。怖いもの見たさが勝った者が。

「諦信殿、諦信殿、どうか、それ以上は……　」扉の外、若い修業の僧が声を潜めて押し留めている風ではあるが、その声は震え今にも泣きだしそうな具合をみせていた。

【諦信とな、さてこの日ノ本の青年、坊主か出家の身か】

異人が何やら喋りはじめたのは良いがさっぱり要領を得ぬのも当たり前のこと。

後を引き取るように青年が話し始めた。

「諦信先生は、祟りの心配はなく、雷も火も心配ないので堂内へお進みくださいと申しています」

なんと諦信という法名を名乗っているのは異国の者ではないか。

この男が日本政府によってアメリカから招かれたアーネスト・フェノロサであり、この国の仏教と信仰、美術・芸術を守るため東奔西走していたことは後になって知ることとなった。

三井寺法明院は桜井敬徳和尚から諦信なる法名を授かり、改宗まで果たす熱量には後にお師様も厚く関心を寄せておられた。重ねては、狩野派の狩野永悳より狩野永探理信なる画号を持つことを許されたというからどれほど才長けた御仁であろうか。

三人の闖入者は仏殿の裏へと回り込むと身の丈七尺に届こうという長物包みを眺めはじめ何やらヒソヒソとやっていた。

「諦信殿、どうかお待ちください。どうかそれだけは、お留まりください」

【ほう。ついに解かれるか。二百数十年の時を経て、お師様がその御姿をお見せになられるのか。一二一代管長・千早定朝の姿がみえぬということは了承済みか。ことは上から

の流れなのだろう】
　厳重に木綿布で包まれてはいたが、雨漏りが禍したものか所々腐っているではないか。お師様の足であられるのか鼠が齧ったような跡も見られる。
【とは言うたもののこの木綿布、随分長持ちしたものである。二百数十年である】
　鼠の齧った跡がその出入り口であり餌取り場となっていたものか、人の気配にあてられた大きな青大将がお師様の足元破れ目から顔を覗かせると、胴をくねらせながら暗闇に逃げ込んでいった。
　いつの間に来たのか、数人の修業の僧たちが扉口から顔を覗かせ止めに入る言葉を口にした。他の者達はみなお堂の下から遠巻きに見守っている。

　木綿布に男たちの手が掛かる。「止められぬ」と観念したのか、僧たちは一様に宝珠を手に合掌し観音経を唱え始めた。
一枚、また一枚と木綿布は外されてゆく。

　僧たちは多様を見せた。泣く者もいた。空を見上げ、天変地変に怯える姿もあった。握りしめた拳を腿の前で組んでいたのは怒りなのか。仲間の僧侶の袖を掴む者もいた。
　数人の坊主が伽藍向こうで剃髪頭を寄せ合って何やらヒソヒソとしておると眺め観れば、懐から金を取り出し、一人の坊主に渡している。どうやらあの坊主が勝ったのか。
　二百数十年という年月はそれぞれの中、始末のつけようもなく多様を見せるに至ったのだろう。
　立ち合い僧たちの読む経がひと際大きく堂内に響くと、お師様を包んでいた布ははらりと床に落ちた。三人の男たちは一様に固唾をのみ立ち尽くしたままではあったが、諦信と呼ばれた異人がその場に膝をつき手を合わせるや、他の二人もそれに倣い膝をつき手を合わせ一様に首を垂れた。三人ともが涙をみせ手を合わせていた。
　救世観音菩薩立像が二百数十年の時を経、神々しい御姿を顕された瞬間だった。後に、この者たちの働きが奏功を見せお師様は修復されその後この夢殿にお帰りになられた。
諦信と呼ばれ、英名、アーネスト・フェノロサと呼ばれた男はその後も何度もこの地を訪れ、法隆寺に伝わる宝物美術品の保存によく務めた。
大きな口を開けよく笑い、心優しくあるものの己が信念に忠実であり語るべき言葉を持った男と映った。
【そうか。あれから八十年以上の月日が流れているのか……　同じく、画業に通じ仏の道とも通じているはずのこの不染鉄という男。さて、何がこの男の憂鬱を裏打ちしているのだろうか】

　憂鬱を抱えし中老男は静かに歩いてくる。気付かぬうちに踵や爪先で雨水や玉石をいじめることがないように。雨水や玉石の身の置き所が変わらぬよう、傷つかぬよう。と、歩みを止めたと思いきや、膝を折りながら長靴に纏わり憑く枯葉を剥ぎ取り眺めはじめた。

男は傘の高さまで腕を挙げ伸ばすと枯葉を手放してみせた。濡れていたが故か。揚力を持たない枯葉は男の手を離れた途端に失速をみせ、鼠色した石たちの元へ返ってゆく。
枯葉を跨ぎ、傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩いてくる。手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもない。ただひたすらと傘を手にこちらを向きむこうに佇む。
哭くわけではなく憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。気配がけぶること無き様子からは間も無くの雨上がりを予感させた。

「どうにも、寂し気よのぉ……　」
「そうでございますなぁ」
「ふん。しかし救いを求める風ではなし、利益 (りやく) を求める風でもなし」
「では何故あって、このつめたい秋雨の堕ちる中通い来るのでしょう」
「分らぬか。八十数年前のあの男も一緒じゃよ。心から愛するものの末期に触れた者は、どの道どちらかを抱えみせる。笑ってみせるか、泣いてみせるか。生きることとはその生き様をみせること。抱え持ったものに変わりはないのだよ」
「……　はい」
「近づいて来ぬな…　」
「…　はい。近づいて来ませぬ」
「どれ、あかりを灯してみよ」
「……　如何でしょう」
「うむ……　近づいて来ぬか」
「近づいて来ませぬ、いつもの様に」
「そのうち来ようか。未だ熟せず、慌てることも無い」
「……　慌てることはありませぬなぁ…　」

南の空の雲間、横一条の光明が射す。
それはさながら雲を割る如きの異形を想わせた。
男は足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄はじめた。
コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながらあらぬ方向へと転げてゆく。何やら生きているようでもあり、人の一生を見せられているようでもあり……　と思えた。
傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせる。踊っているようにもみえ踊らされているようにもみえる。

「あやしておるわ」
「あやしておる…のでございますか。誰をでござ……　」
「……　寂しげよのぉ…　」
「はい…　寂しげにございますなぁ…　」

帰途につくのか。男は細く絞った秋雨のなか背中をみせた。南の空から射し込む光明が濡れた背中を照らし出す。
温かく、柔らかであり、この世の患いの凡てを癒す功徳を授けるように。
今日もまた、手を合わせるわけではなく。お勤めをするわけでもなく、何かを願うわけでもなく……　男は静かに夢殿を後にした。
二百数十年ぶりの御開廟から八十数年の時を跨ぎ、守った者は笑い顔を見せ、伝え残す夢殿を描いた者は泣き顔をみせる。
人々の信仰のあり様はこの斑鳩の地に今も息づいている。
数多の想いに支えられながら。
「道詮、晴れたようよのぉ……　」
「はい。お師様。いい按配にございますなぁ…　」

了

作品詳細
2021 年に脱稿した夢殿・第三形態だが、光文社が「テーマ・絵」を出したのが 3 月だったろうか…　チョイと事情があるのだが、「テーマ・絵」に夢殿という画を触媒とした作品を応募することがわたしとしては、あまりにも幼稚に感じられたため送ることを見合わせた経緯がある。これは私の変り者的拘りであるからして笑い飛ばしてやって欲しい。

六月にテーマ・ゲームの発表があり、これに併せて数カ所改稿して応募したものであるが、先の作品でも申し上げたように、残念ながら企画版元・光文社様の公募作品に対する扱い姿勢と、筆者の考える価値観が相まみえないことを確認するに至り、結果をまたず自作をここで公開することにした一本である。
ちなみに書き記しておくが、コンテストの選定基準について物申しあげるような、不遜なことを申し上げる気はない。あくまでも業務上の作品扱い姿勢に対する価値観である。
尚、ここで紹介するにあわせ、句読点と体裁を修正している。

さて、この作品においても「ゲーム」という言葉は使っていない。その代わりに言葉としては「博打」「勝つ」「負けるな」という言葉であり、情景で “ゲーム” がイメージできるような仕上げにしている。また、生きることのゲーム性を御仏の目や修行の僧を通じて滲ませている。
光文社の言うテーマゲームはモチーフであるからして、応募を考えられる方は正面からゲームという言葉に捉われる必要もないのは道理。
寧ろ置き換えが作品を重層的なものにするという側面もある。

鱗　粉

タイトル■　鱗　粉

「あぁ…　、いい風。健ニイ……　折角ここまで来たのだからもう少し歩いて行こうよ。私、買いたいものがあるの。天気も良いし、たまに私に付き合ってもいいでしょ？　」
振り返り、僕を見た真弓の髪には紋黄蝶がとまっていた。
【あんなに頭を振っているのに逃げ出さない…　卵でも産みつけてるんじゃないか…　】
「いいけどさ、どこまで行くんだよ。腹が減っちゃったから早く帰りたいんだよ。それともマーが飯を奢ってくれるのかな」
「よく云うわよ、逆でしょ？　私が奢ってもらおうと思っていたんだから…　はぁい！　決まり決まり！　じゃぁ、買い物ついでに可愛い妹にランチをご馳走しよおー　」
「ったく…　しょうがねぇなぁ…　」僕はそれ以上逆らうことも無く、真弓の後ろに付き従った。
「マー…　どうでもいいけどさ、お前の頭の右側に紋黄蝶がとまっているぞ」
「エー？　嘘…　どこどこ？　」真弓は歩くのを止めると、首をすくめながら頭を前に突き出してみせた。お昼間近の太陽は、五月だというのにうんざりするほど熱かった。
　真弓が首をすくめると、くぼんだ鎖骨下に汗が流れ込んでゆくのが映る。

「とろうか」僕は手を伸ばしかけた。すると真弓は何も言わず両手を前に突き出し、僕の動きを制止した。

「何だよ…　とらないのか？　」
「何してるの？　蝶々さん…　私の髪にとまって…　」
「何しているかは知らないけど、もうずい分長くとまっているぞ。どれどれチョット見せてみろ」
「健ニイ、とっちゃダメだよ…　何しているか見てみて」
「わかったから、チョット見せてみろ」まったく…　多分、何かのお告げかラッキーハプニングぐらいに考えているのだろう。僕は、蝶の様子を覗うべくそっと真弓の頭を引き寄せた……
　蝶が飛び立つことはなかった。羽をゆっくりと上げ下げしていた。呼吸を整えているようにすら見える。5月半ばの陽ざしが真弓の髪にふりそそぐ。と、僕はそこにキラキラとした輝きを見つけた。
　ヘァグロスを吹きつけたように、金色の艶を纏った真弓の髪が優しく風に靡く。僕は静かに鼻から空気を入れる。僕の肺が朝のシャンプーの香りで満たされた頃合い、見計らったように真弓が口を開いた。
「えっ…　健ニイ、なに？　何してるの…　チョットどうなってるの、教えてよー　」
僕の胸をグーでトントンと叩く真弓。寝かしつけていたはずの想いが揺り動かされたように疼く。
「うん。あのね、綺麗なんだよ…　紋黄蝶の羽の鱗粉がさ、マーの髪の毛に、ヘアグロスを吹き付けたみたいに金色になってるんだよ」
「マジで　？　チョットわたしも見たいしー　みせて見せて、撮って見せてよぉ」

「わかったわかった、ちょっと待てよ、今撮るから…　」僕はスマホを取り出すと、カメラアプリを起動させ、レンズを髪の毛と蝶々に向けた。紋黄蝶は相変わらず、ゆっくりと羽を上下させていた。

「撮るから動くなよ…　」
「うん」
　僕は何度かシャッターを切ると、ゆっくりと歩きながら写真を呼び出した。真弓の黒髪に留まった蝶の周辺は、鱗粉で金色になっていた。
「みせて見せて…　」
　そう云うと、僕の手からスマホを取り上げ写真に見入った。
「カワイイ…　綺麗ねぇ…　何してるのかしら、わたしの髪で」
　真弓は指で写真を拡大する。
「ねぇ…　ニイ、この子、怪我してると思う…　」スマホを僕に手渡すと「ほらここ…　」そう言いながら写真を指差した。
　咄嗟に僕の目は写真を追わずに真弓の指の躍動を追う。
「ねっ、羽のここのところ、チョット剝げてるよね、色が変わっているもの…　可哀想…　」
　慌てて目を写真にうつすと、確かに色が薄くなり、剝げかかっているところが見て取れた。
「きっと、鱗粉が剥げちゃって、上手く飛べなくなっちゃったのかもしれないな…　」僕はそう真弓に告げた。
「私の髪に鱗粉をつけたから？　　」少し悲しげに真弓が呟く。
「いや、多分何かから逃げたんじゃないかな、他の昆虫に食べられそうになって、逃げた時に傷を負ったとか…　蝶はね、鱗粉がはげると上手く飛べなくなって、絶命しちゃうらしいからな」
「ウマク…　飛べない…　そして死んじゃう？　　」
「うん」
「……　まだ居る？　　あの子？　　」
「あぁ、ゆっくり羽を動かしている」
「ゆっくり羽を休めてね…　。私も…　うまく飛べない…　ひとだから」
　僕の前をゆっくり、頭を揺らさず歩く真弓は静かにそう吐露してみせた。と、何を想ったのか急に立ち止まると、前を歩いていた真弓は、僕の後ろに回り込み風裏にでも入り込むように背中近くに頭を寄せながら、僕の腕を掴んでいた。

「なんだよ、ひとを風よけに使いやがって」
「だって、直射日光が当たると弱っちゃうでしょ、この子」
「そうだな…　飛びながら体温調節をする生き物だからな、飛べるようになるといいけど」

　どこからだろう。カラカラと乾いた竹を打ち鳴らしたような音が聞こえてくる。空気が乾燥しているためか、それとも季節外れの尋常ならざる日差しを浴びた音のせいなのか。歩くに従い“カランカラン”と乾いた音を伸ばしはじめていた。
「鯉のぼりが泳いでる…　」
「鯉のぼり？　今頃かよ」僕は進行方向左前方を見ながら歩いていたから気が付かなかったのか、右斜め前の庭先では、鯉のぼりが泳いでいた。
「健ニイ…　あの鯉のぼり、音がする…　カランカランって。なんでなんで？　」
　真弓は僕の背中につけていた頭を外すと、肩口から顔を覗かせそう云った。確かに音は鯉のぼりから届いていた。
「オモシローい。うちの鯉のぼり音しなかったよね？　」
「しないよ…　普通しないだろ、音なんか」
「普通って何ヨ…　誰が決めた普通なのよ」
　真弓は僕の一言に気色ばんでみせた。幾つかの言葉に過剰に反応するところがあるのだが…

「カランカランって…　ほらマー、鯉のぼりの口元のところに竹の短冊が吊ってあるの見えるか？　音の正体はあいつだな、きっとあの短冊に願い事とか書いてあるかもしれないな」
「へぇ…　そんな風習もあるのねぇ…　。ねぇ…　まだあの子つかまってる？　私の髪に…　」
「あぁ…　でも、ちょっと動いてないなぁ」
「そう…　触っちゃダメよ、静かにしておいてあげて」真弓はそう云い残すと元の体制に戻り、僕の背中に頭をつけたまま腕をつかみながら歩きはじめた。
　どれほど歩いたろう。右だ左だと背中から指示を出す真弓の声に従いながら炎天下を歩いてきたが、目指す目的地に到着したのか、背中から頭を離すと「ここよ、ここ。ここに来たかったの」そう云いながら破顔をみせた。
「待てよ、着いたのはいいけどさ、喉が渇いたよ。何か飲もうや」
「そうね、じゃぁ、あそこの自販で買ってくるわ、何がイイ？　」
「お茶だね…　冷たいお茶」
「ニイ…　今頃、温かいお茶って云われてもありませんから」真弓は笑顔をみせると、道向こうの自販機へと小走りで駆け寄った。
【なんだここの店、ここに買いたいものがあるのか…　アジアン雑貨専門店…　しかし女はこういう店が好きだなぁ…　どうせチョットしたら捨てちゃうのだろうに】
　僕は真弓を待ちながら店横に設えられたベンチに腰を下ろした。
「はい、お待たせ、冷たいお茶 (笑)　」
「有り難う」
「それにしても暑いね、お茶飲んで、欲しいものを買ったらご飯に行こうね」真弓は汗の流れる首もとをハンケチで押さえ眩しそうに笑っている。

「外は暑いでしょう、中で涼みながら休んでくださいな」店の主だろうか、僕たちにそう声を掛けてきたのは、四十がらみの清楚な雰囲気を湛えたご婦人だった。
「はい、有り難うございます、でもこれ…　飲んでるから…　」
「大丈夫よ、他に誰も居ないから、飲みながら中で涼んでね」
　店の中はところ狭しとアジア各国の雑貨が陳列されていた。
「来たかったんです、わたし、ここのお店」真弓は店の主にそう告げた。
「そうですか、じゃぁ、お近くなのね、お住まい」お茶を飲みながら店内をうろつく僕の向こうでは、当たり前の会話が繰り広げられていた。
「ニイ、ごめん、チョットこれ持ってて…　わたし、買ってくるから」
「あぁ、腹が減ったから早くな」
「はぁい」と間延びした返事を残すと目的の品の陳列コーナーへと向かう真弓の後ろ姿を目で追う。
【何を買うのやら…　】そんなことを考えながら目線を店の奥へと移すと、そこにはバンブーレースが掛けられた小部屋が口を開けていた。

　入り口には「オラクルタロット占いの部屋」という手書きのブラックボードがかけられている。入り口わきには、黄色い背景に白黒二匹のスフィンクスか猟犬か、ライオンのような動物を従えた車に乗った戦人 (いくさびと) が描かれていた。
　下に読めたのは THE CHARIOT…　戦車という言葉と七を顕すローマ数字のⅦだった。【これはタロットカードの七番目のカードという意味なんだろうなぁ】そんなことを考えていると店の主が近寄ってきながら僕に話しかける。

「可愛らしい妹さんですね…　。えぇ、今お手洗いに行かれてますからすぐ戻りますよ…　ご興味おありですか？　　タロット」

「あまりよくは知らないんですけど、確か戦車というカードですよねあの画。なんでしたっけ…　大アルカナカードと呼ばれる…　意味は…　確か勝利とか前進とか達成とか…　逆だとまた意味が違うとか…　」僕はそこまで云うと主の言葉を待った。
「よくご存じね、興味がおありなのね…　お好きなんでしょこういうの。言葉が必要になったらいつでもいらしてね、お兄さんにはこのカードが守り札になりそうだから、これをプレゼントするわ」主は掌にのる程度の黒いポチ袋を僕に手渡した。

「お待たせ…　ごめんねニイ、お腹すいたよね、ランチいこ、ランチ、どうもありがとうございました、ステキなものを紹介してくれて」真弓はそういうと店の主の手を握った。
「いつでも遊びに来てね別に買わなくたっていいから、お兄さんもまたいらして頂戴ね…

　」
雑貨屋をあとにし、蕎麦屋で冷えた蕎麦を流し込むと、僕たちは自宅に戻った。
「何を買ったの？　　」
「あのね、風鈴を買ったの…　すごく可愛い風鈴…　みてぇこれ」真弓は嬉しそうに包みを開き箱から品物を取り出した。カラス細工なのだが、上部には竹で編んだ籠が被せてある。縦長の風鈴。胴体部分には、マーブルチョコレートを想わせる硝子のビーズが埋められていた。
光が当たれば綺麗だろう…　僕はそう思った。

「でもね、この風鈴…　“音消しの風鈴”っていって、音がでないのよ。ただね、特別な風が吹くとその風と共鳴して音が出るんだって…　素敵よね」真弓は手にした風鈴を矯めつ眇めつ眺めていた。
「馬鹿だなぁ…　音の出ない風鈴? 普通、音が出るだろう、風鈴て。聞いたことがないよ音の出ない風鈴なんて」僕はそういうと脳裏に雑貨屋の主人の顔と言葉が浮かんだ。
【興味がおありなのね…　言葉が必要になったら、いつでもいらしてね】
真弓が言葉をつづけた。
「またニイは”普通”って云った。それは、誰の普通で、誰のための常識なのよ…　」口を尖らせた真弓は普通という言葉を嫌った。
　僕は気付いた…　すっかり忘れていたことに気付いた。
「マー、蝶々が居なくなってるね…　」
「あっ、そうだ！　　えっ居ないの？　　飛んでった？　　私たち…　忘れてた？　　あの子のこと…　」
「マー、チョットそっちを向いてごらん…　動くなよ、写真撮るから」
「何？　　うん」
　そこには紋黄蝶が留まっていた痕跡だけがはっきり残っていた。蝶の姿を形作るように、周辺だけが鱗粉で黄色く彩られ、真ん中は真弓の地毛の色を見せていた。
「切り絵みたいだな…　」
　撮った写真を見せると、真弓は嬉しそうに声を弾ませた。
「飛べたのよ、きっと…　ありがとうの印なんだわこれ…　あの子からの。やだ、どうしよう、髪の毛洗えないしぃ…　」
「よく云うよ、死んじゃって堕ちちゃってたら気持ち悪いだろう？　　」
「飛べたのよ」真弓はそう云うと、音の鳴らない風鈴を明け放した窓辺に掛けた。
　いい風が部屋の中を抜けてゆく。音の鳴らない風鈴は、黙り込んだきり風にその身を任せたままに右に左に揺れていた。

　ふと真弓を見ると、雑貨屋の主人から僕ももらった黒いポチ袋を開け始めていた。
「あそこのママさん、お守りくれたの。ニイも貰ったでしょ？　　」
「あぁ…　そう云えば貰ったなぁ。なんか、タロット占いもやっているらしいね、あのお店」

「そうなのよ、結構当たるって評判みたいよ……　ウンショっと…　二人で一緒に見せあいっこしよ…　ほら早く、ニイも開けてよ…」
「子供じゃあるまいし、しょうがねぇなぁ…　はい。いつでもどうぞ」
「せえのーで！　　」僕たちは声をそろえてポチ袋からカードを引き抜き見せあった。
　真弓のカードには、インフィニティー、無限大をモチーフとした黄色い蝶を頭上に戴いた大アルカナカード、Ⅰ番のマジシャンが描かれていた。
　僕のカードには、大アルカナカードⅥ番の恋人たちが描かれ、女性の頭の周りには、たくさんの黄色い蝶が描かれていた。

「健ニイ…　あの子…　ちゃんと一緒に帰って来てたね…　ここまで」
「あぁ…　」僕はそれ以上の言葉を見つけることが出来なかった。
「ふゅるるるぅぅぅぅ〜」部屋の中を抜ける風には、ラベンダーの甘苦い匂いが混じっていた。音の鳴らないはずの風鈴が、微かに音を奏で始めた。
「あっ…　」僕たちは顔を見合わせ笑いあった。

　了

作品詳細
　風を受け、音もなく大きく棚引くことが当たり前の鯉のぼりからカランカランと音がする
　風を受け．チリンチリンと涼し気な音を鳴らすはずの風鈴は、音を鳴らさない…
この辺は、わたしの好きな対極にあるものを置くというスタイル。
テーマを浮かび上がらせる触媒役。ここでは「普通」という言葉との触媒役だ。
　何が、当たり前でそれは誰にとっての当たり前なのか。誰が決めた価値観なのか。

　同性婚書類の受理不受理がニュースになり
　LGBTQ が当たり前に不平等を口にする
　百合なるコンテンツが人気を博し、BL がチョイと後ろに追いやられてる
　SC や BC が当たり前の時代が来たとしても…　多様性から眺めれば、さて文句を云われた筋合いでもなさそうである。
　何が普通で何が異常か…　むしろ、独善の危うさは形骸化したコミュニティーの価値観に見られることを覚えておいても**___** **___**　オモシロいよね。

「違った見方をしてみるもの楽しい」
本質でしょう。

あとがき

只今編集中

画を通じて書いたショートショート小説集2022版

著　　飛鳥世一

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社